

は し が き

1990年代に入りASEAN諸国の政治は、インドネシア、シンガポール、マレーシア3国では支配的政党の下で権威主義的支配が強まり、タイでは依然軍部の政治介入が続きながらも政党政治が一定の安定を増し、フィリピンでは政権交替を契機とする安定的な政権への模索が行われるなど、これらの政治動向は近年の目覚ましい経済発展とともに注目を集めている。しかし政治現象を基礎的部分で規定し、伝統的社会や価値原理のうえに形成されているASEAN諸国の政治システムや構造について、政治学の視点から本格的な分析・研究を行ったものは未だ多くない。ASEAN諸国の政治過程や政策を決定する主要アクターには、軍、官僚、国王が挙げられるが、政党もその役割を担う主要アクターのひとつである。故に政党に焦点を当てながらASEAN諸国の政治システムや政治構造をみることは、その政治現象の背後に潜むメカニズムの理解や今後の政治の行方を知るうえできわめて重要であると思われる。

本書はこのような問題意識から、アジア経済研究所地域研究部において実施した『ASEAN諸国の政党政治』研究会（主査 村嶋英治、平成2～3年度）の成果をとりまとめたものである。研究会には研究所内外のASEAN地域や各国の政治の専門家が参加し、各国別に主要政党の歴史、政党制度の変遷と現状、および政党の社会的背景、とりわけ財界、軍部、労働組合、宗教団体などとの関係の分析を行い、70年代に入って出現したASEAN諸国の権威主義的政治体制下における政党の特質についても検討を試みた（なおASEAN諸国の政治体制については、萩原、村嶋編『ASEAN諸国の政治体制』アジア経済研究所、1987年を参照していただければ幸いである）。

言うまでもなくASEAN各国の歴史、社会構造、植民地期の政治・経済、

戦後の政治過程や政治システム、さらには経済構造に大きな違いがあり、戦後の政党政治の展開においても共通性だけでなく、各国の「特殊性」が多々みられる。本書では「政党政治」の厳密な定義を行っていないが、「政党が統治すること」と広く捉え、政党が政治過程の主要アクターとなるだけの力を備えた時、「政党政治」が始まる、と理解している。また各国の対象時期やアプローチの方法もあえて限定的に統一しなかった。そうすることで、それぞれ固有の歴史をもったASEAN諸国の政治の多様性がカバーでき、その特質がよく浮かび上がるのではないかと考えたからである。

構成は、第1章「インドネシアの政党政治」(首藤もと子)で、主としてインドネシアに政党が出現した植民地期末から、政党政治が「華やか」であった1950年代の時期に焦点を当てて政党の社会基盤の分析を行い、第2章「マレーシアの政党政治」(萩原宜之)は、各民族集団別の政党・政治運動の政治過程に焦点を当て、マレーシアの多民族性と地方性を基盤とする政治の特質を浮かび上がらせ、第3章「フィリピンの政党政治」(藤原帰一)は、戦後期フィリピンにおいて、前マルコス期、マルコス期、アキノ期という政権交替のなかで、2大政党制がどのような変容を遂げたのかを検討し、第4章「シンガポールの政党政治」(岩崎育夫)は、人民行動党の「ヘゲモニー支配制」がどのように成立し、その構造はどうなっているのか分析を試み、第5章「タイの政党政治」(村嶋英治)は、タイでの政党政治の開始の時期である1944~47年に焦点を当て、この時期に成立した政党政治モデルが今日まで継続していることを明らかにしている。これら第1~5章が国別分析に当てられているのに対し、第6章「現代政党理論再考」(小林正弥)は、今日における政党理論の主流であるダウズ=サルトーリ・モデルの妥当性を、ASEAN諸国と戦前期日本の実例に照らして検証し、第7章「ASEAN諸国の政党政治試論」(岩崎)では、ASEAN諸国の政党政治にみられる共通特質の抽出を試みている。また巻末に付録として、ASEAN各国の主要政党の綱領などを訳出した。それらはインドネシア・ゴルカル(高橋宗生)、マレーシア・U

MNO（東川繁）、シンガポール・人民行動党（岩崎）、タイ・政党法（村嶋）の順序で収録されている。

研究会活動の過程や本書が出版にいたるまでの過程で、多くの方々のお力添えをいただいた。名前は省略させていただくが、ここに記して感謝したい。本書がどこまでその狙いを達成することができたのか、読者の皆様の御叱正を仰ぐしかないが、本書がASEAN諸国政治の理解を深める一助となることを願うものである。

1992年10月

編者